

勉強会・懇親会 の 参加申し込み方法

F A X
E-Mail

- 1 : 申込み用紙に記入しFAXしてください。 FAX番号 : 052-201-2218
- 2 : 申込み用紙に記入しメールに添付してお送りください。 E-Mail : Takachika.Imai@jp.sony.com

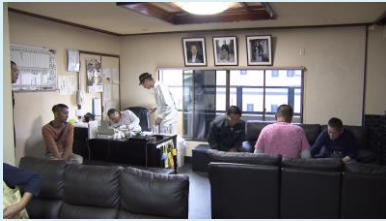
■メールで申込みの場合はタイトルに「勉強会参加申し込み」とご記入ください。

■懇親会（有料・場所未定）の参加についても同様に申込み用紙にてお申し込みください。
なお参加料金は3,000円～4,000円を予定しています。

10月8日（木）上映予定の作品

東海テレビ放送 『ヤクザと憲法～暴力団対策法から20年～』

講師：中根芳樹カメラマン



この20年、取締りの際の断片的情報はあがるが、暴力団の内側を描いた番組はなかった。ただヤクザのイメージと実態は今、乖離しているようだ。縄張り抗争、拳銃所持、地上げ、覚せい剤の密売…そんな裏社会を想像させるヤクザの世界。しかし、いまヤクザは少し違う。以下3つを合意事項として取材は進んだ。

- ・取材の謝礼金はなし
- ・取材テープなどは放送まで見せない
- ・顔のモザイクは原則しない

この番組は、暴力団側から撮影を許されたのは基本的に組事務所の中の取材のみ。取材は映像で何かを表現するというよりも、知られざる彼らの生態をじっくり観察することを第一としている。映像については、彼らに対するテレビ局側の表現が非常に難しいという意味で、なるべく特殊な映像表現をしない事とし、ごく一般的なニュース映像と同じレベルにこだわっている。暴力団をどう表現するか。心中をさらけ出す暴力団員のシーンでカメラマンは何を考え、どのように撮影し、何を撮らなかったのか。また、社会制度と社会通念の中で生きにくくなったヤクザの心象をカメラマンはどう表現しようとしたのか、しなかったのか。覚悟と怯えの半年間、ヤクザにカメラを向け続けたカメラマンからの現場報告です。




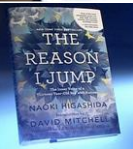
名古屋テレビ放送 『奪還～英雄の妻 佐々木敦子の70年～』

講師：浅井大輔カメラマン



1971年3月、名古屋市愛知県体育館で開催された「世界卓球選手権大会」。東西冷戦の時代、断絶していた中国とアメリカが手を取り合うきっかけとなった、いわゆる「ピンポン外交」。その立役者が、卓球の世界選手権を3連覇し、建国間もない中国に夢と希望をもたらした荘則棟（そうそくとう）だ。番組はその荘と、この時名古屋で出会い、のちに妻となった佐々木敦子さんの壮絶な人生を描いている。敦子さんは1944年に当時の満州で生まれ、敦子さんは22歳ではじめて日本で暮らすことになるのだが、心は中国を求めていた。そんな時に名古屋で「世界卓球選手権大会」が開かれ、そこで荘と出会う。荘はのちにスポーツ大臣にまでなっていたが、それまで権力を握っていた「四人組」が失脚。荘は「四人組の協力者」とみなされ4年間、監禁され、さらに地方へ追放された。敦子さんは、荘の境遇を知り、何とか救おうとした。いつしか2人は恋に落ちた。しかし結婚を認めない中国政府。大きな犠牲を払い2人は結婚したが、2013年に荘がガンで亡くなった時、中国当局はかつての「英雄」の葬儀を禁ずると告げてきた。英雄とその妻の波乱万丈の人生。

10月9日(金) 上映予定の作品

福井テレビジョン放送 『私を覚えていてください 素敵に日本人へ』	講師：畑 祐一郎ディレクター
 	<p>第二次世界大戦中、ナチスの魔の手からユダヤ難民を救ったリトアニア日本領事代理・杉原千畝。救ったユダヤ人は 6,000 人。人道的見地から本国の命令に背いて日本国通過ビザを発給、ユダヤ難民はソ連を経由し、日本海を渡って福井県の敦賀港へ上陸。敦賀市民は彼らを温かく迎え入れた。その後ユダヤ難民は世界に散らばり、73年の時を経てその子孫は25万人となった。70年もの年月は、直接関わった人たちに高齢化の波をもたらした。当時8歳だった難民は現在80歳を超え、他の難民も多くは亡くなっている。だが、杉原千畝と敦賀、日本の記憶は風化することなく、彼らの胸に深く刻まれている。</p> <p>番組は73年ぶりに敦賀の地に立ったかつての難民の記憶を頼りに、逃亡の軌跡を追う。また当時の写真に写っている女性の娘がニューヨークにいたことが判明。家族のルーツ、過酷な逃避行、救いの手を差し伸べた日本という国。それぞれが戦後70年の今、重く語りかけてくる。リアルタイムで刻々と状況が変わる海外取材でのエピソードを中心に、長年追いつけたテーマについて取材ディレクターが熱く語ります。</p>
NHK 『君が僕の息子について教えてくれたこと』	講演：渡瀬竜介カメラマン
  	<p>今から2年前、13歳の日本人少年が書いた本「The Reason I Jump」(東田直樹さんの著書「自閉症の僕が飛びはねる理由」)が北米やヨーロッパのノンフィクションの売り上げランキング上位に突如躍り出た。</p> <p>人とのコミュニケーションがうまくいかない自閉症の、それも子供が書いた本はほとんどなかった時、自閉症の人たちはどんな世界に生き、何を思っているのか・・・この1冊の本は、自閉症の子供の心の闇に一筋の光を照らしたとして、悩み苦しんでいた親たちの宝物となりました。なぜ、飛び跳ね続けるのか? なぜ目をあわせようとしないのか? なぜ、関係ない言葉を突如、口から出してしまうのか? 自閉症の世界と向き合うための道標がこの本にはたくさん詰まっていたのです。番組からは、本の作者・東田さんの言葉に一言も漏らさずカメラを向け、伝えきれない自閉症患者の心に必死に寄り添うカメラマンの姿がひしひしと伝わります。撮影現場の苦労話、エピソードからカメラマンと取材対象との様々な「在り方」を深く考えさせられる作品です。</p>

★10月9日(金)は午後9時半より懇親会を予定しています

[TOPページに戻る](#)